

## 2009.12.05 レポート 「高知県の教育の現状と課題」

テーマ：高知県の教育の現状と課題～「高知県教育振興基本計画」をめぐって

【日時】	2009年12月5日(土) 午後4時～6時
【場所】	高知大学国際・地域連携センターセミナー室
【参加人数】	18人
【問題提起者】	伊藤拓瑠(人と地域の研究所・学生研究員)
【コーディネーター】	松永健二(人と地域の研究所・理事長)

### ■はじめに 松永健二 (人と地域の研究所・理事長)

全国一斉に行われた「全国学力・学習状況調査」と「全国体力・運動能力、運動習慣調査」の結果から、高知県は「学力」について特に中学生では基礎的な問題、活用の問題ともにその平均回答率が全国水準を大きく下回っていること、「体力」については小学生で男女とも全国第47位、中学生では男子45位、女子46位と、いずれも全国最低水準であることが、マスコミ等で大きく報道された。

また、今年9月に高知県教育委員会が今後10年間を見通した中長期的な計画である「高知県教育振興基本計画」を策定した。資料等も含めて100ページほどの冊子です(勉強会参加者の皆さんには当日1冊ずつお渡した)。この中で、高知県の教育の現状と課題について「良くも悪くも」多くのページを割いて記述されている。これを一つの「材料」にして、「教育の現状と課題」について考える機会にしたい。

### ■問題提起 伊藤拓瑠 (人と地域の研究所・学生研究員)

高知県は「全国学力・学習状況調査」による“学力”(および体力)が低い。県はこの結果を受け、今後の高知県の教育の軸をつくるため、「高知県教育振興基本計画」(以下「基本計画」)を策定した。

この冊子を見てみると、高知県の子どもは“学力”こそ低いものの、学習意欲に関しては全国平均並みである。にもかかわらず“学力”が低いのは、公立中学等の“荒れ”や共働きによる収入の不安定さといった学習環境にある。また、学校外での“勉強”も、全国に比べてのきなみ低い(この問題は、本当は“勉強”をやっていない分「何を」しているか

を問題にしなければならないはずなのだが)。

このようなデータを基に、「基本計画」では今後の方向性を打ち出している。そのうちの一つが「教育による社会変革の実現」である。だが、この複雑極まりない「現代」において、「教育による社会変革」という大きなテーマを成し遂げるために、果たして本当に“学力”を上げることが必要なのだろうか。また、県の言う「教育による社会変革」を成すために、「本当に必要なこと」とは一体何であろうか。今回の勉強会ではこの問題を提起する。

## ■教育に関わるキーワードは？

討論に先立って、自己紹介を兼ねて、「教育」ということに関わってキーワードと思われることを一人2つずつ挙げてもらった。以下、順不同で列挙する。

社会、市民、子ども、家庭、生きる力、育む心、コミュニケーション、聴くこと、贈り物（プレゼンはプレゼント）、保護者の責任、大人力、修復的司法、フィンランド・メソッド、答えのない教育、効率、自律、放課後、自立、自分のしていることの意識、文化、読書、課題、可能性、待つこと、主体性、聴く、学び会い、対等性、自律、協働、エンパワーメント、インシデンタル学習

「身につけるべき力」とは何か？あるいは「教育」や学びを支える仕組み・方法などに参加者の関心が集まっている。

## ■討論

### \*高知県の教育の問題点は？

高知県の教育について、家庭の取組が他県と違う。

「学校教育に対する親の期待」について、高知県と徳島県の比較が「基本計画」にあるが、かなり違う。

教育について議論する場合、「ここだけの話」のような「噂」や「身近な例」などによってなされることが多く、必ずしも事実に基づいて議論されない。

高知県では、「教育」が政治の道具にされてきたこともあったのではないかと？

「土佐の教育改革」は、立場の違う人も含めて議論が進められ、教育をめぐる環境も改善してきたのではないかと？

学力が全国に比べて低いのは果たして問題なのか？

学力が低いのは問題ではないという意見が出たが、親としては問題だと思う。

公立中学校からは進学校に行けない。落ち着いて学習できる環境にない。

高知における産業のあり方の「違い」が「学力」の重要性についての認識の違いに結びついているのでは？

「社会人力」、最低限の基礎学力は必要

### \*教育は社会変革の実現に寄与するのか？

グローバルが叫ばれるが、むしろローカル性が大事では？

地域や郷土の歴史文化等の理解を深めること。

「学力」はなくても社会変革できるんじゃないか？

選別教育から、個々の子どもの能力を生かす、伸ばす教育の方向へと教科のカリキュラムなど変えていかなければならない。

学ぶ側の「効率」が問われるべき

評価の画一性が問題

先生が「教える」から「学ばない」。高知の子どもは「教えられるのを拒否している」のではないかと。「教えない」で学び合い教育を。「学力」もあがる。

教育というのは、「学力」「体力」だけではなくて他の要素もある。全国で何位ということが問題ではない。条件がいろいろ違うのだから。自分で自分を形成していくことが大事。高知は自分で自分の地域を作っていくという力は大きいのでは？

「不登校」の生活で、哲学的なこと、なぜ生きているのか、友達とは何かなどを考えていた。自分で考える力、「妄想力」、自己評価

「教える」教育から「参加型学びへ」

世の中は良くも悪くも変わっていく。そういう未来の社会を作り支える担い手をどう形成するか？ どんな社会にしたいと考えるか、自由に議論することが必要ではないか？

教育とは鏡である。大人が考えるべき時。大人が変わることが一番大事で一番難しい。

「社会」に人間が合わせていくのか？

一人一人が自己実現できる社会。経済発展中心の社会から、人間中心の社会へ。

弱者が排除されない社会へ。

生命維持に必要なこと以外はしない社会

現職教員として、皆さんのご意見を聞いて、私のいまやっていることってなんだろう、と思った。私たちができることはなにか、教師としての原点を改めて感じた。

社会人として大学院で学んでいる。ある意味最高の道楽。学びたい時に学ぶことができることを保障するような社会。

折れやすい若者。したたかに生きてほしい。いまの若者が30年後社会の「中堅どころ」を担う。

若者が「時代」を作っていく。自分の人生を作っていくこと、選び取っていく。

以上、討論の中で出た意見をざっと挙げてみた。進行係の進め方のまずさもあって、なかなか深まった議論やまとまった議論にはならなかったが、年齢も立場も違う参加者が「教育」について議論しながら、それぞれに考えを深めることができたのではないだろうか。

「学校教育」だけではなくて、広く「学 び」の環境を改善していくために、いったい何ができるのか。今後そんなことを考え、行動していきたいと改めて感じた二時間だった。

(文責：松永)